

学生時代からの宿題

話し手●安成哲三（所長）

聞き手●三村 豊（センター研究員）+ 遠山真理（特任准教授）

地球研では、2016年度に導入されたプログラム-プロジェクト制のもとに多様な分野の研究者が集まり、プロジェクトに取り組んでいる。地域や国内外の関連機関と連携しながら、地球研として、現代の環境問題にどのように向き合うべきなのか。あらたな年度を迎えるにあたり、所長の考える地球環境学と、その原点となった学生時代の経験を、若手研究者へのメッセージとして語っていただいた

——いま、若手の研究者に伝えたいことは？

みなさんがそれぞれのフィールドに行つて、トランスディシプリナリー（TD）研究をするのはよいのですが、だいじなのは、そのときの目線です。TD研究は、現地のことを考えて研究することが前提ですが、大切なのは謙虚さ（humility）です。「上から目線」ではダメだということです。

いまわれわれが取り組んでいる地球環境学は、広い意味で近代科学を一つの武器にしていますが、その近代科学そのものが問題ではないかと感じています。そのことにわれわれが初めて気がついたのは、1968/69年の大学3年生（年生）のときでした。理系も文系も関係なく、よく議論をしたものです。あのときのわれわれの議論は飛びすぎていたのですよ。ある意味、

先に行き過ぎていて、問題提起はできても解決はなかったのです。しかし、地球上での自然と人に関わるさまざまな問題は、もちろん環境問題もふくめ、理系も文系もない問題や対象ばかりです。学生時代からのさまざまな分野の研究者といっしょにフィールドを歩き調査することを通して、自然に対する見方・考え方の多様性を学ぶことできた貴重な機会でした。

—— 所長の考える地球環境学とは？

一つは、「地域から地球」ということです。前回の「所長からのメッセージ」（『地球研ニュース』66号特集1）にも、「地域と地球、つまり地域のことだけではなくて、地球のこともふくめて、地球全体とのつながりを考えてほしい」と書きました。やはり、地域のなかだけでは地球環境の問題は解決できません。私がみなさんにもうすこし考えてほしいのは、地域の問題が、グローバルな問題のなかでどういう位置づけになっているかということです。地球環境問題の解決をめざす場合、日本の地域のかかわってくる。地域のなかだけでの解決をめざすのではなく、もうすこし広い視野で見たとき、それがほんとうの解決になっているのかどうか……。

みなさんが地域の問題に取り組むときの視点では、「そんな小さなことと地球のことをどうつなぐんだ」という問いもあるでしょう。系統的に考えれば、日本にしても外国にしても、アジアにしてもアフリカにしても、それぞれの地域の問題は、より大きなグローバルな問題から派生していることがわかります。

地球研のプログラム-プロジェクト制には、「プログラムでさまざまな問題をつないで大きな問題を考える」という視点を置いたつもりです。5年間のプロジェクトでは、あるていど集中して現地の人とかかわって問題を解決することに、みなさんは一所懸命に取り組んでいますし、そうしなければ



パタゴニアへと南下する船上で（1968年12月）

ばと思う。地球環境学という視点は、最終的にはグローバルスケールでの持続可能性や未来可能性の一環として地域があると考えることだと思います。

—— 全共闘時代の議論は、所長にとって大切な経験だったそうですね。

当時われわれが全共闘運動で問題にしたことの一つに、〈調査する側、される側の論理〉がありました。もう一つは、われわれが学問としていた科学、近代科学とはなんなのかということです。これらには、ある種の限界性があるのです。

18、19世紀くらいに、科学のディシプリンがかたちづくられたことには、それなりに意味があったとは思いますが、いまはその限界が見えている。その端的な例の一つが地球環境問題です。地域もふくめて、環境問題はまさに「科学の限界性」の一端です。

私の問題意識はずっとこのあたりにあります。それに気づいたのは、1968年、学部生のときに探検部からの「調査隊」として訪れたパタゴニアです。じつは私は、「探検をしたい」と思って大学に入りました。「未知のところに行くんだ」とはりきっていたのです。

地球上で未知のところを「地図の空白」といいますね。けれど、南極はべつとして、地図の空白部にだって、むかしから現地の原住民やインディオが住んでいるのです。それを無視して、「ここは地図の空白部だからおもしろい」というのは、完全にヨーロッパ中心の帝国主義的な論理だったのです。

1969年の春、私がパタゴニアから日本に帰ってきたら、大学は全共闘運動のモードになっていた。探検部の連中には「おまえらはなにをしてきたか？」と非難されて、

パタゴニアの探検で芽生えた問題意識を語る口調には、おのずと熱がこもる

やすなり・てつそう

1947年生まれ。専門は気候学・気象学、地球環境学。京都大学博士(理学)。京都大学東南アジア研究センター助手、筑波大学地球科学系教授、名古屋大学地球水循環研究センター教授などをへて、2013年から現職。筑波大学、名古屋大学名誉教授。名古屋大学21世紀 COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」、名古屋

大学グローバル COEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」拠点リーダー。地球研究プロジェクト評価委員会委員、地球研運営会議委員、WCRP(世界気候研究計画)国際科学推進委員会などを歴任。6月から Future Earth 国際科学委員に就任。趣味は登山など。学生時代には京都大学探検部に所属、チリ・パタゴニアの学術調査などを行なった。

受賞歴

日経地球環境技術賞
日本気象学会賞、藤原賞、山本賞、水文・水資源学会国際賞、功績賞
モンゴル国自然環境功労研究者賞
地球惑星科学連合フェローなど

みむら・ゆたか
専門は建築・都市史、歴史GIS。二〇一二年から地球研に在籍し、二〇一六年からは研究基盤国際センターセンター研究員。とおやま・まり
専門は科学コミュニケーション。学生時代に生命科学(地球学)に携わり、科学館スタッフ、大学の研究所広報を経て二〇一六年一〇月地球研広報室に着任。



氷河を測量中の安成隊員 (1969年1月)

日本の状況はパタゴニアに行く前とはずいぶんちがっていました。しかし、これが私にとってとても貴重な経験だったと思います。探検することと、探検されることの意味がなんなのかについて深く考えることになりました。

——パタゴニアが〈探検される側〉の議論のきっかけだったのですね。

パタゴニアには、少数ですが、モンゴロイド系のインディオが残っていました。もともとは数万人もいたのですよ。それが激減したきっかけはいろいろありますが、一つは、チャールズ・ダーウィンが1830年代にパタゴニアに行ったことです。それ以降、ヨーロッパから大勢の人がパタゴニアに入って、結核などの病気を原住民に蔓延させたのです。抵抗力のない原住民は次々に病気にかかり、人口が減った。私たちが行ったときに残っていた原住民は数十人でした。最近になって現地に行った人の話によると、数人いるかいらないかという

たとえば研究者が、「少数民族を調査する」と言って現地に入ります。西洋流の論

理で考えると、学者は民族を調査して論文を書くことで評価される。けれど、論文の対象になった原住民の先のことはあまり考えていない。逆に、絶滅の片棒を担いでいるところもあるのではないかなと思う。調査された人たちにとって、論文はマイナスにはなっても、なんのプラスにもならない。これはまさに、調査することで現地からなにかを得る〈侵略する側〉と、帝国主義的に文化的な力を持ち〈侵略される側〉の論理です。これがとても問題になりました。「あの民族はほうっておいたら絶滅するから、そのまえに現地に行っておかないと、論文にはならない」というのは、論理としては完全に、〈する側〉と〈される側〉の分断された関係にあります。論文を書くことは重要です。ただ、研究者の態度としてどうふるまわなければならないかも重要なことでしょう。

——調査や論文が、その地域を豊かにするのなことですね。

民族の場合は相手が生身の人間です。しかも、いわゆる先進諸国の人から見たらレベルの低い生活かもしれませんが、彼らは彼らでそれなりに文化があつて、豊かに暮らしている。幸福度や豊かさはGDPでは測れないのです。

アイヌの問題も同じです。極端な話、「アイヌのことをほんとうに考えるなら、北海道は独立させるべきだ」という議論が、私たちの時代にはありました。けれど、けっきょくは日本人と同化してしまった。同化することはほんとうによいことだったのか。アイヌ固有の文化などがすべて消えてしまう可能性があるのです。民族を単に残すだけでよいのかという問題です。これはやはり、当事者がどう判断するかが大切です。

南北(発展途上国と先進国)の格差の問題は、ある意味で、地球環境問題と根っこがおなじです。たとえば、北の「近代化」によって生じている環境負荷の責務は、南

も地球全体の責務として考えなければならなくなっている。暮らしの質や経済状況から見ても、はたしてそれは平等と言えるのでしょうか。だから、地球環境問題では、南北問題をどうするか大きな問題です。

一つの枠組みとして、「地球全体で生きてゆかなければならない」という話があります。地球上のどこでも、それなりに豊かに暮らしたい。そのときにCO₂が増えるのは困ります。地球全体として、どういうライフスタイルや価値観をもつべきかという問いが当然出てくると思います。このときに不平等な価値観を先進国の人たちが植え付けるようなことは絶対にあってはならないのです。

歴史のなかで、はやくに文明化したところと、そうでなかったところとの差が厳然としてあります。いまのSDGsは、「誰一人取り残さない——No one will be left behind」というキャッチフレーズを掲げていますが、言うは易しで、実現はむずかしい。

——近代科学の限界を超えるには?

近代化や近代科学には問題がたくさんあり、その限界も見えてきている。われわれがいままさに生きているのは、こういう時代です。こういうときになにをどうすべきか。このむずかしい状況を、むしろいい機会として、価値観をどんどん変えるべきときなのです。

とはいえ、近代科学を批判し乗り越えるには、やっぱり、とことん近代科学をしなければならぬ面もあるのです。プログラムディレクターの杉原薫さん、西條辰義さん、中静透さんなど世代的に私にちかい人々と若い人たちのあいだで、こういった議論をしてみたいですね。みなさん、いろいろと考えているでしょう。いわゆる研究会ではなく自由な議論の場でどうですか。とてもだいじなことですよね。そのなかで、安成批判がでてきてもいいじゃないですか。(笑)

(2018年5月11日 地球研所長室にて)

参考文献

安成哲三「近代科学の限界——環境問題はなぜ解決しないのか」渡邊誠一郎、中塚武、王智弘編『臨床環境学』名古屋大学出版会、2014年、pp.63-74
安成哲三「地域と地球をつなぐ思想——「近代化」をどう克服するか」『地球研ニュース』第66号、2017年、pp.2-3

安成哲三「地球の論理と地域の論理——生態地球科学の提唱」文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」世界と地域の共存、地域と生態環境A01、第7号、1994年、pp.33-34
安成哲三、藤井理行「ヒマラヤの気候と氷河」東京堂出版、1983年、p.254
米本昌平「独学の時代——新しい知の地平を求めて」NTT出版、2002年、p.244
安成哲三先生のページ <http://www.chikyu.ac.jp/yasunari/yasunari/bak/>